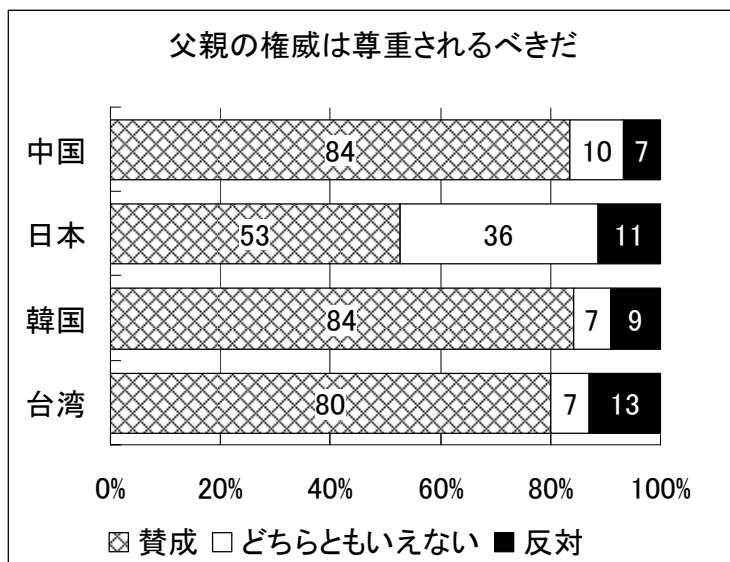


大阪商業大学比較地域研究所が、東京大学社会科学研究所の協力を得て 99 年から行っている「日本版総合的
社会調査 (JGSS)」の一環として、中国、韓国、台湾の研究機関と共同で実施した「東アジアにおける国際比較調
査 (EASS)」の結果がまとまった。EASS (East Asian Social Surveys)の特徴は欧米の研究者が中心になりがちな国
際比較調査において、東アジア社会に特有な問題や関心に基づいて、共通の設定問を設定し、国際比較分析を行
うプロジェクトである。第一回目となる EASS 2006 のテーマは「家族」で、以下の興味深い結果が出た。結果の詳細
については、6 月 7 日・8 日に大阪商業大学で開催される「JGSS 国際シンポジウム 2008」で報告する。

調査主体 中国: 香港科技大学調査研究中心・中国人民大学社会学部
韓国: 成均館大学サーベイ・リサーチ・センター
台湾: 中央研究院社会学研究所
日本: 大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所

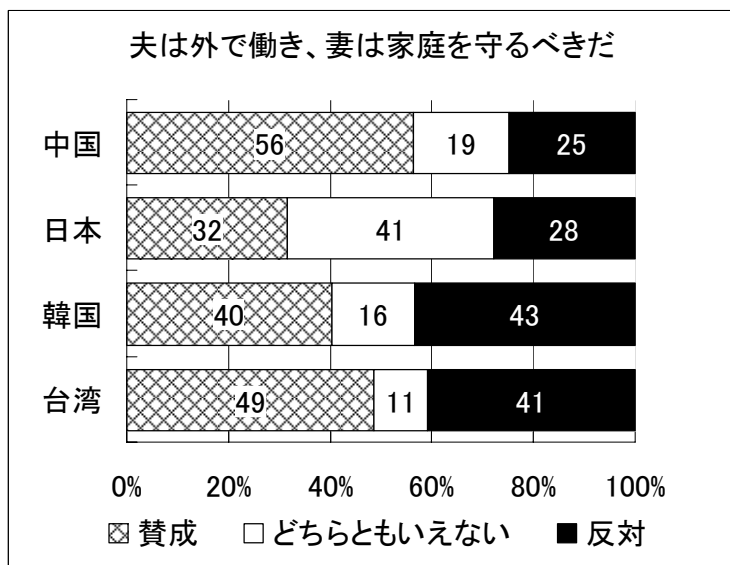
回答者 無作為に抽出した東アジア 4 カ国・地域の 20~69 歳 (中国 3,110 人、韓国 1,430 人、台湾 1,824 人、
日本 1,756 人)。

1. 存在感の薄い日本の父親



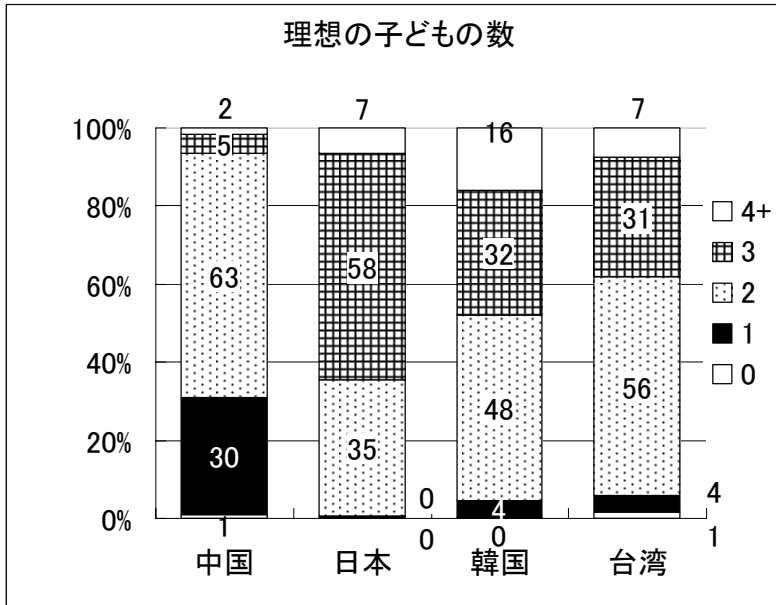
日本では家庭における父親の存在感の低下が叫ばれて久しいが、中国・韓国・台湾と比べても、「どのような状況においても、父親の権威は尊重されるべきだ」と考える割合が著しく低い。中国・韓国・台湾では 8 割以上の方が賛成しているが、日本では 5 割にとどまる。

2. 東アジアの中でも性別役割分業規範は賛否両論



東アジアでは、伝統的に男女の役割分担をよしとする風潮が見られたが、今回の調査では中国以外では賛成意見と反対意見が拮抗する傾向がうかがえた。就業している妻の割合がもっとも少ない韓国 (47%) で性別役割分業規範への反対意見がもっとも多く、就業している妻の割合がもっとも多い中国 (88%) で賛成意見がもっとも多い。現実と理想が逆転しており興味深い。

3. 理想の子どもの数

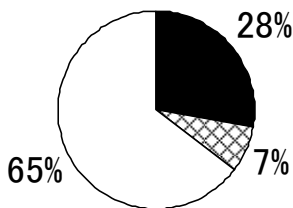


2005 年度の合計特殊出生率は日本 1.26、韓国 1.08、台湾 1.12、中国は 1.8 (2000 年から 2005 年の平均推計) であり、少子化は東アジアの共通した現象である。少子化の要因としては、晩婚化、非婚化が挙げられるが、これらの国・地域では理想の子どもの数に大きな差がある。中国では、「1 人っ子政策」の影響か 9 割以上が 1 人ないし 2 人と回答している。一方、日本では理想は 3 人以上と答える割合が 6 割以上を占め、人々の理想と現実が乖離する外的要因が強く働いているようである。韓国では 4 人以上の多産を理想とする割合が多く、台湾では 2 人以下を理想とする割合が 6 割をこえ、各地域の少子化要因の差異を示唆している。

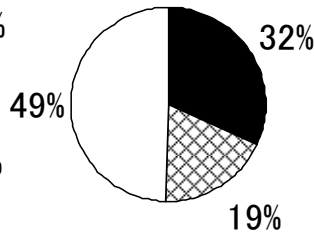
とする割合が多く、台湾では 2 人以下を理想とする割合が 6 割をこえ、各地域の少子化要因の差異を示唆している。

4. 子どもは男の子？女の子？

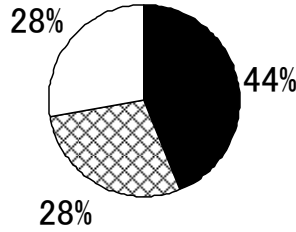
中国 男性



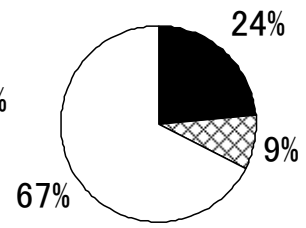
日本 男性



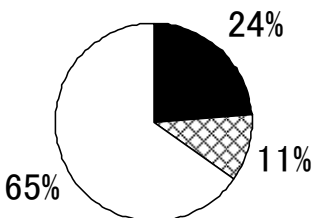
韓国 男性



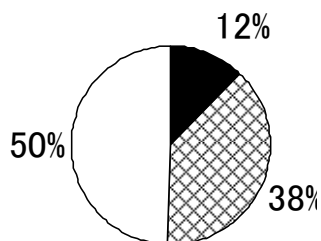
台湾 男性



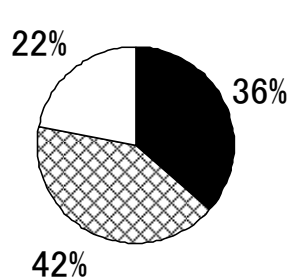
中国 女性



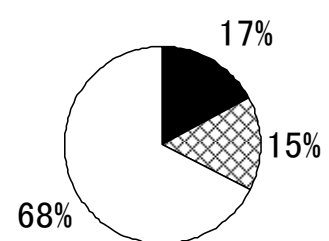
日本 女性



韓国 女性



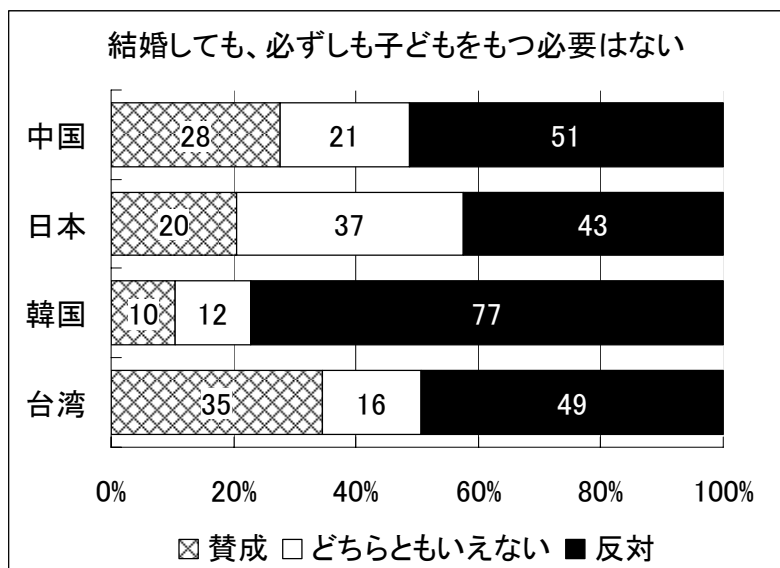
台湾 女性



■ 男の子 ☒ 女の子 □ どちらでもよい

「もし子どもを1人だけもつとしたら」と尋ねられると、中国と台湾では、男女とも3分の2の人は「男の子と女の子のどちらでもよい」と回答し、日本でも半数の人は「どちらでもよい」と答えている。どちらかを希望した人に注目すると、日本では自分と同性の子どもを希望する人が多く(男性は男の子、女性は女の子)、中国と台湾では男の子を希望する人が多い。韓国では、希望する子どもの性別を明確に答える人が多く、とくに男性は男児選好が強く、「家系の存続のためには、息子を少なくとも一人もつべきだ」という意見についても韓国男性の6割が賛成している。家系の存続意識と希望する子どもの性別との間には強い関連が認められる。

5. 「結婚＝子どもをもつ」?

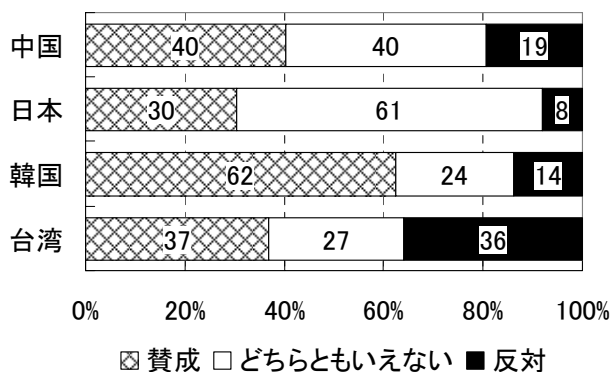


韓国では、8割近くの人が「結婚すれば子どもをもつべきだ」と考えている。中国と台湾では「子どもをもつべきだ」と考える人が半数を占める一方で、「必ずしももつ必要はない」と考える人も約3割いる。日本では、結婚観・子ども観がさらに多様化しているためか、「もつべき」と「どちらともいえない」がそれぞれ4割、「もつ必要はない」が2割と分散している。男女を比べると、日本、韓国、台湾では、「持つ必要はない」と考える人は男性よりも女性に多く、中国では男女差はない。

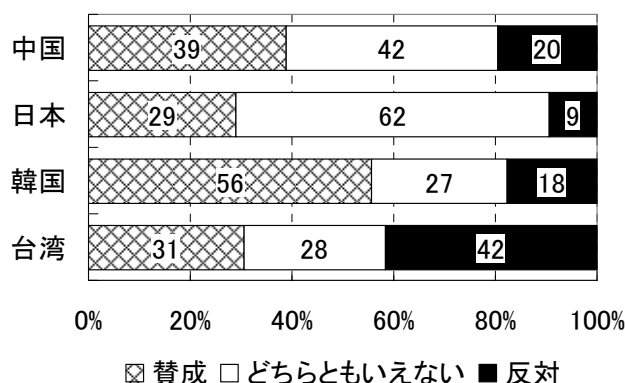
6. 「結婚＝幸せ」と断言できない日本人

「結婚している男性は結婚していない男性よりも幸せ」と言えるかどうかを尋ねたところ、日本では「賛成」が3割と4カ国・地域の中で最も少ない。しかし、逆に「反対」とする人も8%と最も少なく、過半数の人は「どちらともいえない」と回答している。韓国では「結婚＝幸せ」という価値観を6割の人が肯定し、台湾や中国では賛成と反対に分散しているのに対して、日本ではイエスともノーとも言わない人が多い。「結婚している女性は結婚していない女性よりも幸せ」という意見についても、同様の結果が得られた。

既婚男性は未婚男性より幸せ



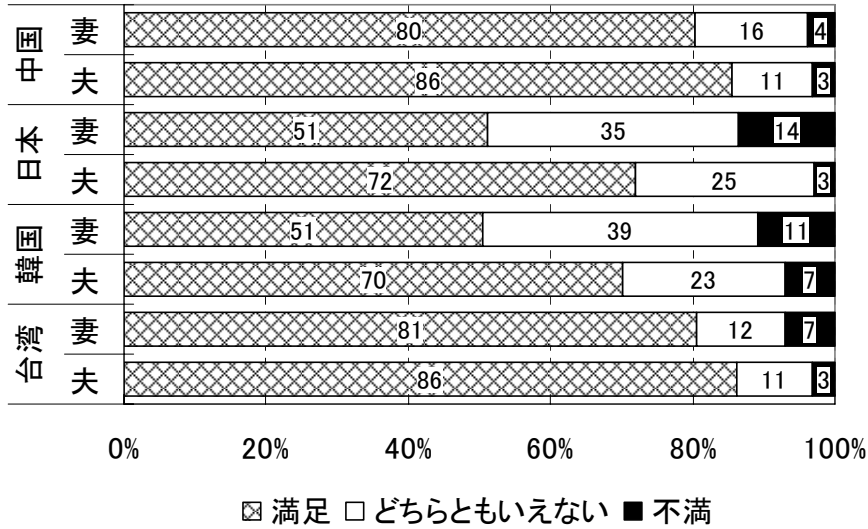
既婚女性は未婚女性より幸せ



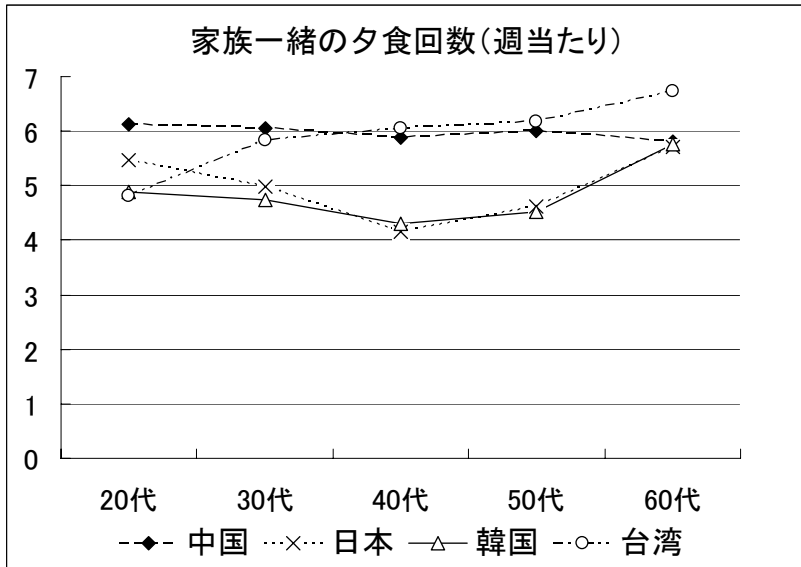
7. 東アジアに共通する夫婦間のコミュニケーション不足

結婚生活に満足しているかどうかでは、いずれの国・地域においても「不満」をもつ人の割合は、男性よりも女性の方が多く、とりわけ日本ではこの傾向が強い。日本では、「不満」と回答した男性は 3%であるのに対して、女性では 14%であり、男女差が際立っている。「配偶者が悩みを聞いてくれるかどうか」、「配偶者が悩みを打ち明けてくれるかどうか」についても尋ねたところ、日本と韓国では、配偶者が悩みを聞いてくれない、また打ち明けてくれないと感じている人の割合が、女性では男性に比べて約 2 倍から 3 倍にのぼっている(日本では女性 18%、男性 6%；韓国では女性 17%、男性 8%)。

結婚生活に満足しているか

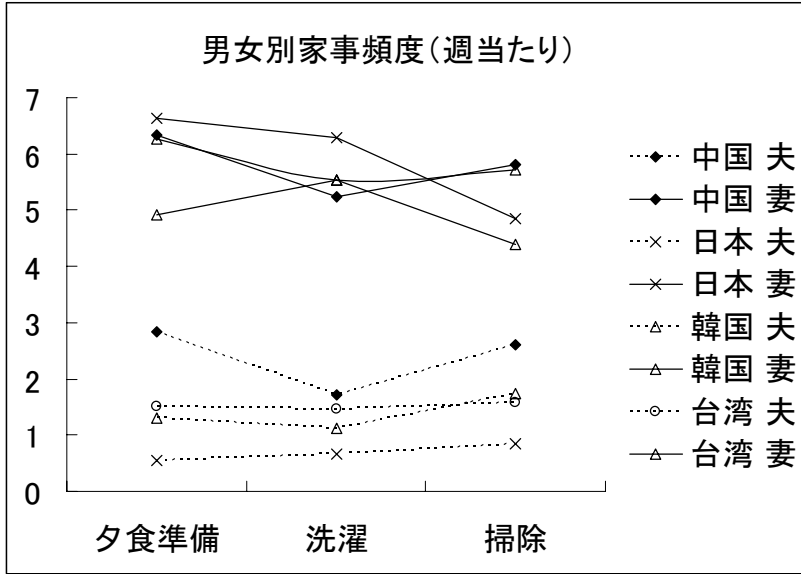


8. 一家団欒の機会が少ない日本・韓国



家族と一緒に夕食をとる回数は、日本と韓国では、回答者が 30 代から 50 代の場合に他の世代に比べて少ない。一方、台湾と中国では、台湾の 20 代以外は、どの世代についても週に 6 日以上は、一家団欒の機会をもっている。日本と韓国では、自宅と職場が離れていたり、子どもが塾に通っていて、夕食時にいないなど、一家団欒を実現できない要因があるのかもしれない。

9. 家事する妻・しない夫

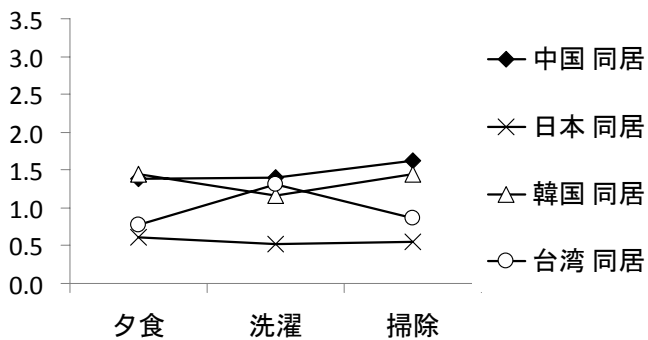


共働き夫婦の割合は、中国 66%、台湾 57%、日本 50%、韓国 48%である。しかしながら、いずれの国・地域においても、家事頻度は夫に比べて妻の方が圧倒的に多い。共働きの多い中国では、妻のみが就業している夫婦の割合も多く（中国 11%、台湾 6%、日本 4%、韓国 4%）、4カ国・地域の中では夫の家事頻度が最も多い。一方、日本の男性は、最も家事をしていない。

10. 家事をしない日本の若者

20代と30代の未婚者の家事頻度を4つの国・地域で比べてみると、日本の未婚者は、親と別居している場合は他の国・地域と比べて低いわけではないが、親と同居している場合には、とくに男性において夕食・洗濯・掃除のいずれの頻度も4カ国・地域の中で最も低い。週当たりの日数に換算すると0.5-0.6日程度しか家事をしていない。一方中国では、親と同居している20-30代の未婚男性であっても、週当たり1.4-1.6日程度家事をしており、大きな開きがある。「パラサイト・シングル」は日本において顕著な現象なのかもしれない。

家事頻度：未婚男性(週当たり)



家事頻度：未婚女性(週当たり)

